中国・雲南震災の友を助けたい

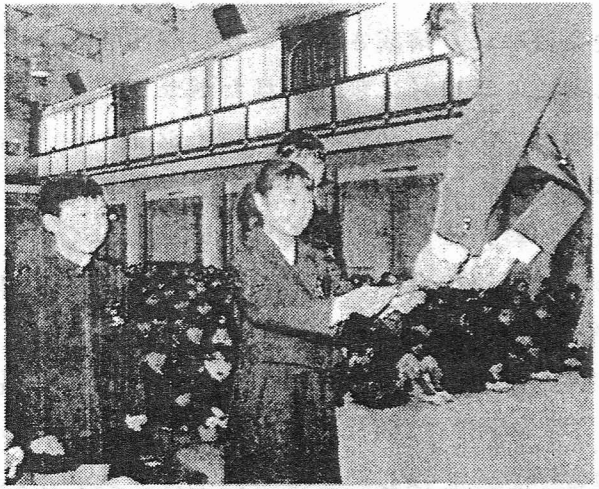
ノートルダム清心女子大付属小

AMDAへ

カンパ10万円贈る

4歳坊やの治療費に

五日にあったノートルダム清心女子大学付属小学校（岡山市伊福町二丁目、片川淳校長）の始業式で、中国の雲南大地震の被災地で救援活動を続けているアジア医師連絡協議会（AMDA、本部・岡山市）に、全校で集めた募金十万円が贈られた。火事で両親を失い、大やけどと骨折をし、妹と残された趙跌侯ちゃん(四)の治療費にあてられる。



集めた募金を手渡す児童代表の6年生たち＝ノートルダム清心女子大学記念館で

AMDAのメンバーが雲南大地震で救援活動している時、地震による火事で下半身に大やけどをした趙ちゃんが病院に運ばれてきた。AMDAは趙ちゃん支援の募金を呼び掛け、同校は三学期の終了式直前三日間に、子供たちや保護者が集めた。絵や鬼の面など七点も渡した。

六年の竹原知里さん(一)ら三人から募金を受け取ったAMDA調整員の笹山徳治さん(四三)は「朝は零下五度で昼間は三〇度と一日の温度差がある現地で、やけどを治すのは難しいんです。趙ちゃんは昆明の病院に移って手術を受けて、徐々によくなっています。日本のみんなの一人ひとりの気持ちを中国の子に伝えます」と感謝した。

笹山さんは、家も学校も壊れた子供たちがいること、テントの中で不十分な医療しか受けられないことなどを説明。今後、小学校再建に取り組むことを伝えた。

子供たちからは「趙ちゃんは何が好きですか」「中国の子供の勉強は難しい？」「中国は寒いのですか」といった質問が次々に出され、笹山さんが答えていった。

AMDA事務局の田代邦子さんは「この震災で苦しんでいる子供がいることを、同年齢の子供に知ってもらい、できることから救援活動に参加してもらいたかった」と説明している。

事務局によると、被災地域に暮らす百万人のうち三十万人が被災。約三十四万戸が全壊した。負傷者は約一万四千人。三月現在で二十万人が野宿し、その三分の一が子供という。